

学習習熟度別学級編成における

高校生の自己受容感と学級適応感の関連性について (2)

The relationship between self acceptance and adjustment to the classroom in high school students who has been divided classroom into degree of achievement of the learning (2)

小川 響¹

¹大妻女子大学大学院人間文化研究科臨床心理学専攻

Kyo Ogawa¹

¹Studies in Clinical Psychology, Graduate School of Studies in Human Culture, Otsuma Women's University
2-7-1 Karakida, Tama City, Tokyo, Japan 206-0035

キーワード：自己受容，学級適応，環境，集団，自己実現

Key words : Self-acceptance, Adjustment, Environment, Group, Self-actualization

抄録

本研究は、学習習熟度別学級編成における高校生の自己受容感と学級適応感の関連性を検証し、従来学力の変遷ばかりに注目がおかれてきた学習習熟度別学級であるが、本研究において生徒の心理的側面にも着目し現代青年期を生きる高校生の適応傾向を探ることで教育現場における適応支援に役立てることを目的とした。学校コミュニティにおける心理職の役割としては、生徒と環境の適合性を最大にする努力をすることが大きなテーマであり、教育現場における教育相談の推進にとっては個人を取り巻く学校コミュニティを重視した取り組みが欠かせない(樺沢, 2014)。このため、近年広がりつつあるこの教育形態を鑑みた研究がなされることは、教育現場における臨床活動にとって意義のあることと思われた。

調査対象者は、学習習熟度の程度により高組・中組・低組の3群に振り分けられた進学高校に在籍する2012年度の入学生260名(男子153名, 女子107名)であった。なお、発達的な視点も取り入れ、高校生活3年間に渡り同集団を調査対象とし、縦断的・横断的に研究した。質問紙法による調査を行い、使用尺度は、宮沢(1987)の「自己受容測定スケール(SAI)」, 大久保(2005)の「青年用適応感尺度」を用いた。

各尺度の因子分析, 相関分析を行った結果, 高組では, 友人同士の繋がりを大切にするというよりは個人の生き方を大切にし, 自分の良い面を最大限に活かせるような生き方を試みることを示唆された。中組では, 3年間を通して他2クラスよりも自分に対して自己分析的であり, 分相応の生活を試みることを示唆された。最後に低組では, 自分にとって誇れるものがある現実自己価値を置き, その面を打ち出してゆくことを積極的に試みることを示唆された。また, 3クラスに共通する発達的な視点として, 3年間を通してMaslowの自己実現理論に従って徐々に自己実現に向かってゆくことがクラスでの適応の要因となっていることが示された。加えて, 自己受容に関しては, 発達と共に自己に対して目を向けられる面が徐々に増えてゆくことが分かり, 自己受容できる側面が徐々に増えてゆくことで自己と環境とのズレを適応的に処理しやすくなることが推察された。

生徒の所属環境により適応傾向に特徴があることが明らかにされたことで, 適応支援の際の一つの知見として教員へのコンサルテーションやケースマネジメント等に活用できる可能性が示唆されることとなったが, 類似研究の少なさから本研究結果の一貫性・信頼性については疑問の余地が残った。このため, 他の学校においても研究を実施する等, 今後繰り返し研究が重ねられることが期待された。

1. 問題

適応とは一般に、個人と環境の相互作用を表す概念で、個人と環境との調和と定義づけられており(大久保, 2005), 高校生までを対象とした適応感研究の多くは、主に学校への適応感や不適応感に焦点を当てている。それらの従来の学校適応感研究では、適応感を規定する環境的な要因として、重要な他者である友人・親・教師との関係および学業に対する姿勢といった因子が挙げられてきており、それらの因子こそが適応感を規定するものと考えられてきた。そのため、学校適応感はいこれらの環境的要因のもとで測定がなされてきており、友人・親・教師との関係も良好で学業にも積極的に取り組む生徒が最も学校に適応していると考えられてきた。しかし、例えばそれらの要因のうち一部が欠如していたとしても、その全生徒が不適応に陥るとは考えにくい。実際に大久保(2005)は、教師との関係が良好でなくとも学校への適応の問題を抱えていない生徒、学業に積極的でなくとも学校への適応の問題を抱えていない生徒も現に存在することを指摘しており、従来の適応感因子を用いて調査を行った結果、教師因子・学業因子が適応感と全く関係していなかった学校があった。つまり、生徒が適応に際して重要視している側面は個人により異なるということがいえる。このことから大久保(2005)は、学校適応感の規定因は学校ごとに異なりその影響の仕方は学校の特徴を反映すると主張している。

近年においては、学習習熟度別学級編成を展開する教育形態が広がりつつあるが、ここでもまた、そのほとんどの実証的な研究の従属変数は成績面に限られており、態度的側面の研究はいまだ十分でない。昨今ではほとんどの生徒がこの教育形態を経験しているという社会的背景から、学習習熟度別学級という集団に属することで生徒は適応感に関してどのような影響を受けているのか、その環境に所属することで生徒は適応に際してどのような側面を重要視するのか、質的に検討する余地はあると思われる。

2. 目的

適応とは、自分の所属環境の有する文化の中で、自分にとっての重要な側面をいかに打ち出してゆけるかということであると考えられる。所属環境の文化は、その集団を成している構成員によって形作られるものであるが、それはすなわち“集団として

目指すもの”でもある。つまり、環境から求められる理想の姿であり、それを目指すことはその環境においての適応の形とも換言できるが、それと自分にとっての重要な側面が合致しているとは一概には言えない。そのような際に生じるものが、自己受容であると考えられる。つまり、自分にとっての重要な側面と自分の所属環境から求められる理想の姿とにズレが生じている場合、その適応をするために必要な側面に関して自己受容を促し、環境との折り合いをつけ適応を図っているものと考えられる。すなわち、自己受容をするからこそ適応することが出来る。所属環境で適応するためには、学習習熟度別学級が生徒にどのような重要な側面を形成させているのかを探る必要があり、またそこにおいて環境と自己とにズレが生じ不適応に陥っているのならば、そのズレの自己受容が促進できるような支援を提供することが臨床的に重要となってくる。このように、自己受容と適応とは密接に関連があると考えられるため、本研究においては自己受容感との関連も検討することとする。

さらに、学級適応感研究を行った小川(2013)において、高校1年生時の結果として学習習熟度群ごとに異なる適応傾向が見られたことから、2年生時・3年生時においても発達的变化に伴い個々の発達課題も変化し、それによって自己にとっての重要な側面にも変化が見られることが予想される。そこで、本研究では、同集団を対象とした高校生活3年間に渡る追跡調査を行う。高校1年生から3年生までの3年間に渡り、年度ごとに各学習習熟度群を横断的に比較、または各学習習熟度群の1年生から3年生までの変遷を縦断的に研究することで、現代青年期を生きる高校生の適応傾向を多方面から探り、教育現場における適応支援に役立てることを目的とする。

集団の適応傾向を探ることは、不適応傾向にある個人の、集団とのズレを明確にする一つの手掛かりとなり、そのズレの自己受容すなわち適応を促進出来るような支援を提供する際の一つの資源となり得る。学校コミュニティにおける心理職の役割としては、生徒と環境の適合性を最大にする努力をすることが大きなテーマであり、教育現場における教育相談の推進にとっては、個人を取り巻く学校コミュニティを重視した取り組みが欠かせない。問題を個々の事例と捉えるだけでなく、学校全体を一つの事例とみなし、チーム支援による対応力の発揮を促すことも重要である。学校コ

コミュニティが持つ資源を整理し、構造化してマネジメントすることが大切である(樺沢, 2014). このことから, 本研究結果は, チーム支援としての教員へのコンサルテーション, または教育現場におけるケースマネジメントの際の一つの知見として応用されることが期待される。

3. 方法

2.1. 調査対象者

学習習熟度の程度により, 高組・中組・低組の3水準を設けた学習習熟度別学級編成を展開する関東地方の進学高校に在籍する2012年度の入学者260名(男子153名, 女子107名)を対象とした。なお, 研究協力校は受験進学校であり, 生徒全員が大学進学を目指している。クラス編成の仕方としては, 入学試験時の成績により成績優秀者から順にクラス分けが成されている。なお, 進級時にはクラス変動があり, 成績優秀な生徒, 成績が振るわなかった生徒は, 前年度の成績に応じたクラスへ移動する。

2.2. 調査時期および調査内容

調査時期は, 2012年9月, 2013年9月, および2014年9月。

質問紙法による調査であり, 2つの尺度を用いた。この他にフェイスシートを作成し, 所属する学習習熟度別クラス, 性別を記入する項目を設け, さらに所属クラスの満足度を6件法で設定しその理由を問う自由記述欄も設けた。使用尺度は, 27項目4件法の「自己受容測定スケール(SAI)」(宮沢, 1987), 30項目5件法の「青年用適応感尺度」(大久保, 2005)を用いた。

2.3. 実施手続き

2012年から2014年までの毎年9月に, 学級を単位とする集団法で行った。研究開始初年度において, 新入生という独特な特徴をできるだけ排除するため, 友人・教員ともある程度交流が行われていることが予想された9月を選択した。以後も, 研究を継続する上で条件を統制する目的で, 前年度と同様の時期を選択している。

また, 各学級担任に協力を仰ぎ, 外的な剰余変数を統制するために全クラス同じ時間の授業内に一斉に調査を行う。

4. 結果・考察

1年生時では, 高組33名・中組88名・低組116名の計237名から有効な回答が得られた(回収率100%, 有効回答率91.1%)。2年生時では, 高組46名・中組57名・低組131名の計234名から有効な回答が得られた(回収率100%, 有効回答率90.0%)。3年生時では, 高組47名・中組62名・低組125名の計234名から有効な回答が得られた(回収率100%, 有効回答率90.0%)。各尺度の因子分析(主因子法社交回転), 相関分析を行った表が, 表1・2・3である。

なお, 相関係数の解釈としては, 小数点第3位以上を四捨五入した値を用い, $r = .30$ までを弱い相関, $r = .40 \sim .60$ までを中程度の相関, $r = .70$ 以上を強い相関とした。

その結果, 高組では, 友人同士の繋がりを大切にするというよりは個人の生き方を大切にし, 自分の良い面を最大限に活かせるような生き方を試みることが示唆された。中組では, 3年間を通して他2クラスよりも自分に対して自己分析的であり, 分相応の生活を試みることが示唆された。最後に低組では, 自分にとって誇れるものがある現実に自己価値を置き, その面を打ち出してゆくことを積極的に試みることが示唆された。

また, 高校生活3年間での学級適応感因子の変遷を見ると, 3年間を通してMaslowの自己実現理論に従って徐々に自己実現に向かっていく様子が見えてくる。1年次では安全欲求や表面的な所属欲求の充足が主軸となり, 外的に満たされたいという低次の欲求がある。2年次では, 1年次よりも深みのある所属欲求が強くなって, 学校生活の主軸となる。3年次では, 外的に満たされることよりも内的に満たされることに焦点が移り, 2年次の所属欲求の強さに代わり承認欲求が表れ, 何らかの目的意識も確立し自己実現欲求も表れる。つまり, 環境への適応とは, その環境に所属しながらいかに自分を打ち出し, 自己実現をしていくかということであり, 換言すれば, いかにその環境で自分にとっての重要な側面の模索をし, 自己受容しながら環境との折り合いを付けてゆくか, ということであると考えられる。

次に自己受容感因子の変遷を見る。1年次では, 何となく自己について把握しているつもりでも漠然としているために根拠のない自信で物事を処理することとなり, 根拠がないが故に新たな躓きに遭遇することとなる。そこで2年次では, 自己を客観的に見つめるようになり, 改めて自分とはど

のような人物であるのかと自己概念の再構成が始まる。再構成をする過程で、短所も含めた様々な自己を発見することとなり、3年次では現実に見合った生活をするようになる。これらの自己受容感因子の変遷を見ると、自己受容とは自己概念の把握の程度であることが推察される。つまり、“自分とはこのような人物である”と自分で説明することの出来る側面の集合であると考えられる。これらのことから、発達してゆくと共に徐々に様々な面に目が向けられるようになり、その現実の自己を真摯に見つめることが出来るようになることが推察された。併せて、発達と共に自己に対して目を向けられる面が増え、自己受容できる側面も徐々に増えてゆくことが推察された。

自己受容できる側面が増えるということは、“その環境から求められている姿と自己像との間でズレが生じた場合”もそのズレを補償するような自己受容がしやすくなるということが考えられる。ズレの状況は個々人で様々であるが、自己の側面をあらゆる方向で見ることが出来るほど、ズレを補う方法も様々考えることができる。ゆえに、学年を経るごとに所属環境との調整を図った適応がしやすくなることが示唆される。現に、文部科学省(2013)の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」の中の「高等学校の不登校生徒数」を見ると、高校1年生では1.5%、2年生では1.2%、3年生では0.9%と、徐々に数値が低くなっていることが分かる。不登校は不適応の一側面ではあるが、教育現場においては無視できないものであり、その数値が減少していることには大きな意味があると思われる。発達と共に自己の側面について徐々に目が向けられるようになることは、不適応に陥った時・または陥りそうになった時の逃げ道を増やすことでもある。つまり、ズレを適応的に処理する方法が増えるということである。

総じて、学習習熟度別学級における自己受容感と学級適応感との関連については、生徒の所属する学習習熟度別学級という環境により各クラスで重要視される学級適応の側面は異なりそれに伴う自己受容の方法も異なるが、発達と共に自己受容できる側面が徐々に増えてゆくことで環境とのズレを適応的に処理することができてきて、それぞれがそれぞれの所属環境に合った自己調整を行いながらその環境に適応することが出来るようになることが考えられる。

表1. 高校1年生時における学級適応感と自己受容感の相関分析 (N=237)

	習熟度別 クラス	適応感			
		T1	T2	T3	T4
		(表面的 馴染みの感覚)	(被関心・ 評価の感覚)	(立場の 同等さの感覚)	(周囲への溶け 込みの感覚)
J1 (得意分野 の把握)	高組	.393*	.480**	.288	.362*
	中組	.195	.331**	.427**	.173
	低組	.460**	.424**	.536**	.418**
J2 (生き方の 指針)	高組	.638**	.551**	.435*	.405*
	中組	.556**	.516**	.433**	.428**
	低組	.558**	.556**	.290**	.397**
J3 (自己理解・ 自立)	高組	.428*	.254	.192	.320
	中組	.465**	.440**	.268*	.466**
	低組	.362**	.216*	.122	.279**
J4 (自己価値)	高組	.513**	.446**	.250	.443**
	中組	.690**	.444**	.214*	.493**
	低組	.666**	.425**	.383**	.487**
J5 (ありのまま で良い感覚)	高組	.343	.326	.329	.326
	中組	.146	.212*	.580**	.247*
	低組	.298**	.366**	.552**	.213*

表2. 高校2年生時における学級適応感と自己受容感の相関分析(N=234)

	習熟度別 クラス	適応感			
		T1	T2	T3	T4
		(グループでの 居心地の良さ)	(目的の存在)	(役割意識の 芽生え)	(被受容感)
J1 (自己価値・ 実存感)	高組	.524**	.695**	.363*	.497**
	中組	.680**	.719**	.384**	.538**
	低組	.455**	.558**	.326**	.369**
J2 (生き方の指針・ 才能理解)	高組	.509**	.754**	.275	.496**
	中組	.533**	.632**	.517**	.448**
	低組	.350**	.633**	.424**	.512**
J3 (得意分野の把握・ 自己理解)	高組	.352*	.489**	.382**	.420**
	中組	.514**	.640**	.652**	.551**
	低組	.377**	.370**	.476**	.310**
J4 (ありのまま良い 容姿の満足)	高組	.041	.216	.385**	.302*
	中組	.326*	.349**	.424**	.322*
	低組	.174*	.131	.392**	.042
J5 (自立感)	高組	.192	.334*	.052	.045
	中組	.237	.361**	.258*	.130
	低組	.271**	.288**	.176*	.230**

表3. 高校3年生時における学級適応感と自己受容感の相関分析(N=234)

	習熟度別 クラス	適応感			
		T1 (自分の 安心感)	T2 (被関心の 感覚)	T3 (個性を活か した馴染み)	T4 (目的意識の 確立の感覚)
J1 (自己価値・実存 感)	高組	.691**	.589**	.263	.682**
	中組	.726**	.540**	.369**	.652**
	低組	.676**	.584**	.466**	.639**
J2 (生き方の指針・ 相応の生活)	高組	.682**	.591**	.285*	.626**
	中組	.611**	.436**	.397**	.657**
	低組	.573**	.514**	.437**	.529**
J3 (得意分野の把 握・個の確立)	高組	.436**	.399**	.490**	.526**
	中組	.616**	.488**	.560**	.484**
	低組	.458**	.460**	.610**	.233*
J4 (人格受容・ 容姿の満足)	高組	.328*	.391**	.447**	.402**
	中組	.479**	.314*	.542**	.386**
	低組	.301**	.197*	.496**	.031
J5 (短所を含めた 性格の把握)	高組	.351*	.282	.122	.249
	中組	.252*	.071	.296*	.222
	低組	.142	.171	.068	.128

自己受容感

5. まとめと今後の課題

生徒の所属環境により適応傾向に特徴があることが明らかにされたことで、適応支援の際の一つの知見として教員へのコンサルテーションやケースマネジメント等に活用できる可能性が示唆されることとなったが、生徒が周囲の環境から適応面に影響を受けることはあっても適応支援の最終地点はどの生徒に関しても同じなのではないだろうか、本研究を進めてゆく過程で考えあがった。それは、適応支援とは生徒が幸せに学校生活を送ることを支えることではないかということである。学校コミュニティにおいては生徒と環境の適合性を最大にする努力をすることがテーマであり、教育現場における教育相談の推進にとっては個人を取り巻く学校コミュニティを重視した取り組みが欠かせない(樺沢, 2014)。ただしそれは、“暗黙裡にある適応の形に近付けさせる”のではなく、あくまでも“生徒個々人の目指す適応の形に近付けさせる”お手伝いをするのが適応支援の在り方なのではないかと思うのである。

とはいえ、生徒個々人の目指す理想の適応の姿に、環境から求められている、集団を成すための理想の姿が全く取り込まれていないのも問題である。Newman&Newman(1984)は、青年期の心理的葛藤を「集団同一性対疎外」としており(ただし、本田・井上, 2006より引用)、青年期において重要

な社会集団から包含または排除されることが心理的に重要である以上高校生にとって自らが所属する学級集団との関わりは非常に大きな意味合いを持つと考えられ、集団凝集性から逸脱することはその個人にとって少なからず疎外感となることが予想される。環境から求められている理想の姿と個々人の中で抱く理想の自己像が異なるにしろ、集団に調和している方が望ましいのは言うまでもない。このため、個人の理想の中に環境から求められている理想の姿が全く取り込まれていない場合はその取り込みが重要となると考えられる。これらのことより、適応支援においては、それぞれの所属集団が目指す理想の適応の形と最低限の折り合いをつけながら、個人の自己実現を共に目指してゆく取り組みが重要であると考えられる。

本研究は、近年目立ちつつある一つの教育形態である学習習熟度別学級編成に焦点を当て、そこに在籍する生徒の自己受容感と学級適応感の関連性について検証したものであったが、類似研究の少なさから本研究結果の一貫性・信頼性については疑問の余地が残った。また、本研究の自己受容の位置づけとして、所属環境から求められている姿と自己像との間でズレが生じた場合に環境との調整を行うものとしたが、実際にはそのような質的なデータが得られたわけではなく、この点で、今後理想自己や現実自己に関する更なる調査も併せて行う必要があると思われる。このため、他の学校においても研究を実施する等、今後繰り返し研究が重ねられることが期待される。

謝辞

本研究の執筆にあたり、質問紙調査や論文執筆に際してのご助言や丁寧なご指導を頂きました本学人間関係学部田中優教授に、心から感謝申し上げます。また、3年間という長期の研究にもかかわらず、質問紙調査の依頼を快くご承諾下さいました研究協力校学校長様、お忙しい中授業時間を割いて質問紙の配布・回答指導をして頂きました担任の諸先生方、調査の度に真摯に回答して下さいました生徒の皆様にも、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所の平成26年度大学院生研究助成A(DA2606)により研究助成を受け行った。

引用文献

- [1] 大久保智生. 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討一. 教育心理学研究. 2005, 53, p.307-319
- [2] 小川響. 学習習熟度別学級編成における高校生の自己受容感と学級適応感について. 日本社会心理学会第54回大会発表論文集. 2013, p.273
- [3] 樺澤徹二. スクールカウンセラー活用の考え方・進め方. 金子書房. 2014, p.66-67
- [4] 宮沢秀次. 青年期の自己受容性の研究. 青年心理学研究. 1987, (1), p.2-16
- [5] 文部科学省. 平成25年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について. 2013, p.72-97
- [6] 本多公子・他. 高等学校の学級集団帰属意識の構成要因が精神健康度及び学校生活適応感に及ぼす効果. 岡山大学教育実践総合センター紀要. 2006, 6, p.111-118

Abstract

In late years a learning class formed according to degree of achievement of the learning is spreading as one education form. However, by the conventional research which observed the educational form, since there were many by which the focus was put on changes of academic ability, by this research, it focused on the attitude side and verified about the high school student's feeling of class adaptation.

In addition, we were intended that we made use for the adaptation support in the educational front by investigating a tendency to adaptation of the high school student who lived in modern youth in this study.

It was shown clearly that an investigation candidate had a difference in an adaptation tendency according to a student's affiliation environment with the results at the time of an entrance examination as a result of research for the student who was able to distribute to the class according to study skill level of three groups.

For concrete taxonomy; Value an individual way of life in a high rank results group. Try a suitable life in a middle results group. The field which it can be proud of for itself in a low grade results group is set forth. The result shown above was a factor of adaptation of each group.

It is a big theme that the role of the psychology job in the school community maximizes environmental compatibility with a student. For the promotion of the education consultation in the educational front, the action that made much of school community surrounding the individual is indispensable (Kabasawa, 2014).

By it having been shown that an adaptation tendency had the feature according to a student's affiliation environment, a possibility that it will be applicable to consultation to a teacher, case management, etc. As one knowledge is suggested at the time of adaptation support. However, the room for question remains by analogy with the fewer other similar studies about reliability, the consistency of these findings. It is a future problem. We carry out the study in other high schools presenting class organization according to the degree of achievement of the learning. Furthermore, we perform comparison when class organization according to the degree of achievement of the learning was carried out in the high school which does not carry out this education form and will think that there is the need of the still deeper examination in future.

(受付日：2015年7月5日，受理日：2015年7月15日)

小川 響（おがわ きょう）

現職：大妻女子大学心理相談センター研究員

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程修了。